A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

46

A・トルストイ

苦悩の中を行くII　金子幸彦訳

中央公論社

世界の文学　46　　©1967

A・トルストイ

訳者　金子幸彦

昭和42年3月1日初版印刷
昭和42年3月10日初版発行　　価390円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　中央精版印刷株式会社製本部

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

苦悩の中を行く　Ⅱ　3

年譜　559

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

苦悩の中を行く　Ⅱ

第二部（つづき）

八

五ヵ月のあいだ、ダーシャはひと気のない部屋にひとりで暮らした。テレーギンは、戦線へ去るにあたって、千ルーブリをおいていったが、それらの金もながくはつづかなかった。幸いにして、一階下の、一月にペテルブルクの重要な高官が家族とともに逃げだしたあとの部屋に、絵画や家具やその他、ありとあらゆるものの買い占めをやっている、勇敢な外国人マッテが引っ越してきた。ダーシャは彼に二人用ベッドや、数点の版画や、磁器の小物などを売りはらった。彼女は悲しい思い出を古い香りのようにとどめている、これらの品物としずかな気持で別れた。過去とともに、すべてがおわったのだ。

品物を売って得た金で、彼女は春と夏とを過ごした。街はさびれた。ペテルブルクから汽車で一時間ほどのところ、セストラー河の対岸に戦線がしかれた。政府はモスクワに移った。宮殿は銃弾で破れた窓々をネヴァ河に映していた。街には灯がともらなかった。民警たちはすでに運命のきまったブルジョアたちの安全を守る意欲をあまり持ちあわせていなかった。夜ごとに、だれひとりいままでに見たことのないような、恐ろしい人々が街頭に現われ、家々の窓をのぞきこみ、ドアの取っ手をしらべながら、暗い階段のあたりをうろついていた。もし用心を怠って鉤や鎖を十個ぐらいもかけないで寝るようなことでもあれば、たいへんなことになる。怪しげな物音がきこえ、見知らぬ男たちが部屋に押し入って、「手をあげろ！」と言うなり、住人たちに襲いかかり、電気のコードでしばりあげて、それからゆっくりと財産の包みを持ちだしてゆくのだった。

街にはコレラが流行していた。いちごの熟れるころになると、まことに恐ろしいことになった。人々は街頭や市場でけいれんを起こして倒れた。いたるところで人々がささやきあっていた。未曾有の困窮が予想された。赤軍兵たちが星の徽章を軍帽にさかさにつけていて、これはアンチ・キリストのしるしなのだ、というような話がささやかれた。またシュミット大尉橋の、とざされた小礼拝堂に、《白い男》がすがたを現わしはじめ、これは洪水の前兆だ、というわさもつたえられた。人々は橋の上に立ちどまって、火の消えた工場の煙突をさし示した――燃える夕焼け空に煙突は《悪魔の指》のようにそ

そり立っていた。

工場は閉鎖されて、労働者たちは食糧徴発部隊へ走り、またある者は田舎へ帰った。往来の敷石のあいだには、青い草が生い茂っていた。

ダーシャが外出するのは毎日ではなく、それも朝のうち市場へゆくだけだった。市場では恥知らずのフィンランド人たちが、こちらの弱みにつけこんで、一フードの馬鈴薯にズボン二着を要求するのだった。市場にはしばしば赤軍兵士がすがたを見せるようになり、ブルジョア制度ののこりかすである、馬鈴薯かつぎのフィンランド人や、ズボンやカーテンを抱えた女たちを、威嚇射撃で追い散らした。食糧を手にいれることが日ましにむつかしくなってきた。ときおりはマッテが、骨董品を罐詰や砂糖と取りかえて、急場を救ってくれた。

ダーシャは、こうしたわずらわしさを少なくするために、食事の量を減らすように努めた。朝早く起きて、糸があればぬい物をしたり、あるいは一三年や一四年の発行日付のはいった本を手にとったりした——それも物事を考えないためだけにするのだ。それにもかかわらず、窓辺に坐って考えにふけっていることがいちばん多かった。もっと正確に言うならば、彼女の思いは暗い一つの点をめぐってさまよっていたのだ。最近の精神的動揺や絶望や悲哀などがすべていまでは脳のなかの、この全く異質の塊りへと圧縮されたかのようであった。病気のなごりなのだ。彼女はひどくやせほそって、十六歳の小むすめに似てきた。しかも彼女は自分のすべてをふたたびむすめのように感じた。だがむすめらしい楽しみはもはやなかった。

夏は過ぎ去ろうとしていた。白夜もおわりかけ、クロンシタット砲台の向こうに燃える入日の色も日ごとに暗くなっていった。五階のあけ放した窓からは、遠く夜のとばりのおりた、人影の薄れゆく街並みや、家々の暗い窓などを見おろすことができた。灯りはともされなかった。道ゆく人の足音がときたまきこえるばかりであった。

ダーシャはこの先どうなるものかと考えていた。この自失の状態はいつおわるのだろう？　やがて秋がくる。雨が降りつづく。また凍てつくような寒風が屋根の上にほえたけるようになるのだ。薪はないし、毛皮外套は売ってしまった。もしかしたらテレーギンが帰ってくるかもしれない……しかし、またしても悲しみ、電球のなかの赤い線、不必要な生活がおとずれるのだ。

力を見いだし、無感覚の状態をふりはらい、生きながら葬られているこの家から立ち去って、この瀕死の町から出なければならない！……そうすれば、生活になにか新しいことが起きるにちがいない……この一年のあいだ

にはじめて、ダーシャは《新しいこと》について考えた。彼女はこういう考えをもつようになった自分に気づいて、興奮し、おどろいた。まるで、かつてヴォルガの汽船の上で彼女のまえに立ち現われた、あの光りかがやく、ひろい世界の照り返しが、望みのない倦怠のとばりをとおして、ふたたびすがたを見せたように思われた。

それからテレーギンを思う哀愁の日々がおとずれた。彼女は新しい、妹のような気持で彼をいとおしみ、彼のがまんづよい配慮や、結局のところだれのじゃまにもならない善良さを、同情をこめて思い起こしていた。

ダーシャは本棚をさがして、ベスソーノフの三冊の白い詩集を見つけた――もはや全く朽ち果てた思い出だった。日ぐれまえに、つばめが窓のそばを黒い矢のように飛びかう、しずかなひとときに、彼女はその詩集を読んだ。詩のなかに彼女は自分の悲哀、孤独、そしていつか彼女の墓石の上に吹きすさぶ暗い風のことをうたった句を見いだした。ダーシャはしばらく空想にふけり、なみだを流した。そのあくる朝、彼女は長持のナフタリンのなかから、婚礼のためにぬった服をとりだし、その仕立直しにとりかかった。きのうと同じように、つばめが飛び、青白い太陽が照っていた。しずけさのうちに、はるか遠くで、ときたま砲声がひびき、近くでは爆ぜるような音がして、なにかが舗道に落ちた――きっと四つ角の木造家屋をとりこわしているのだろう。

ダーシャはゆっくりと、針を動かしていた。やせほそった彼女の指から指貫がはずれ、一度などはもうすこしで窓のそとに落ちるところだった。この指貫をはめて姉の家の廊下でトランクに腰かけ、ジャムパンを食べたことが思い出された。あれは一四年のことだった。カーチャが夫と言い争って、パリへ行ってしまうことになった。彼女は小さな帽子をかぶっていた。それには目立ってつきでた、一本の羽飾りがついていた。すでに戸口まで行ってから彼女はふりかえり、トランクに腰かけているダーシャのすがたを見て、はじめて気づいたように、「ダニューシャ、いっしょにゆかない？……」と言った。ダーシャはゆかなかった。だがいまはパリへ移ることを考えているのだ。ダーシャはカーチャの手紙によってパリを知っていた。香水の箱のように香りたかい、絹のような、空色のパリ。彼女は針を動かしながら、心のはげしい波立ちのために、ため息をついた。ゆこう！　汽車はないし、国境を通過させてくれないという話だ……歩いてでも通りぬけ、ふくろをかついで森や山や野を越え、青い河を渡り、国から国へとぬけて、すばらしい、優美な都へゆくのだ。

なみだが頬を流れた。なんという愚かしさだ。ああ、なんという愚かしさだ！　いたるところで戦争をしてい

て、ドイツ軍が巨大な砲でパリを砲撃しているではないか。空想のつばさをひろげすぎてしまった。それにしても、人間にしずかな楽しい生活をさせないということは正しいことなのだろうか……『わたしがあの人たちになにをしたっていうんだろう？……』指貫がひじかけ椅子の下にころがった。なみだをとおして太陽がにじみ、つばめがものさびしい羽音をたてて飛びすぎた。この鳥たちには、はえや蚊がありさえすればいいのだろう……『やはりわたしは発とう、立ち去ろう！』ダーシャは泣いた……。

しばらくして、玄関に、間をおいて何度かしつこくドアをたたく音がきこえた。ダーシャは針とはさみを窓台におき、ぬい物をまるめ、それで目をぬぐってから、ひじかけ椅子の上にそれをほうりだして、たたいているのがだれなのかをたずねに行った。

「ダーリヤ・ドミートリエヴナ・テレーギナはこちらにお住まいですか？」

ダーシャは返事をするかわりに、身をかがめて鍵穴からのぞいた。向こう側でもやはり身をかがめ、用心ぶかい声で鍵穴に向かって言った。「ロストフからお手紙です」

ダーシャはすぐに戸をあけた。よれよれの兵隊外套を着て、破れた軍帽をかぶった、見知らぬ男がはいってきた。ダーシャはおびえて、両手をのばしたままあとじさりした。その男はいそいで言った。

「あ、どうか……ダーリヤ・ドミートリエヴナ、わたしがわかりませんか？」

「ええ……」

「クリチョークですよ、ニカノール・ユーリエヴィッチです。弁護士さんの秘書ですよ。セストロレックのことをおぼえているでしょう？」

ダーシャは鼻のとがった、ながいことひげを剃らぬ、やせたその顔を見つめながら、手をおろした。すばやく動く注意ぶかい目、その目のわきの小じわが習慣になった用心ぶかさを物語り、ゆがんだ口もとは決意と冷酷さを示していた。彼は危険を見きわめようとする、小さなけものを思わせた。

「お忘れですか、ダーリヤ・ドミートリエヴナ……あのころ、お姉さんの、亡くなられたご主人、ニコライ・イヴァーノヴィッチ・スモコーヴニコフさんの秘書をしてたんですが……あなたにすっかり熱をあげたけど、あのころあなたは手きびしくはねつけたでしょう……おぼえてますか？」こう言って彼が不意に、なにか全く忘れていた、《戦前的》な、人のいい微笑をうかべたので、ダーシャはすべてを思い出した。平らな砂浜、あたたかいものうげな入江の上の、靄のような日差し、《神経質》

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

だった自分、服につけた子供っぽいリボン、誇りたかいむすめらしさのゆえにクリチョークを軽蔑していたことなどを……また昼となく夜となく砂丘の上におもおもしくざわめいていた、丈たかい松林の香りを……。

「ずいぶんお変わりになりましたね」ダーシャはふるえる声で言って、彼に手をさしのべた。クリチョークはすばやくその手をとって、接吻した。その外套すがたにもかかわらず、彼がここ数年のあいだ騎兵勤務をしていたことがはっきりとわかった。

「どうぞ手紙をうけとってください。どこか長靴をぬげるようなところに通らせていただけませんか。わたしはゲートルを巻いておるもんですから」彼は意味ありげな視線を投げ、ダーシャのあとについてからっぽの部屋に行った。そこで彼は床に坐りこみ、顔をしかめながら、泥まみれの長靴をぬぎにかかった。

手紙はカーチャからのもので、カーチャがロストフでテーチキン中佐に託した、あの手紙であった。

最初の数行でダーシャは叫び声をあげ、のどをつかんだ。ヴァジームが戦死したのだ！……目が追いつけないほどの早さで、手紙を走り読んだ。むさぼるようにもう一度読みかえした。力もつきて、彼女はひじかけ椅子の腕木に腰をおろした。クリチョークは離れたところに遠慮ぶかく立っていた。

「ニカノール・ユーリエヴィッチ、あなた、姉にお会いになって？」

「いいえ。この手紙は十日まえにある人から渡されたんです。その人の話では、エカテリーナ・ドミートリエヴナはもうひと月もまえにロストフを去ったということでしたが……」

「まあ！　姉はどこにいるんですの？　どうしているんでしょう？」

「残念ながら、いろいろとたずねてみることができませんでした」

「あなた姉の夫をご存じでしょう？　ヴァジーム・ローシチンを……戦死したんです。カーチャが書いてよこしました――ああ、なんて恐ろしいこと！」

クリチョークはびっくりしてまゆをあげた。手紙はダーシャのほそい手のなかでひどくふるえていたので、彼はそれをとって、夫の死を語ってきかせたヴァレリヤン・オノーリのことを書いてある箇所をざっと走り読みした……クリチョークの口もとが不吉につりあがった。

「わたしはオノーリってやつはこういう卑劣な真似をやりかねない男だといつも思っていました。やつの知らせによれば、ローシチンは五月に戦死したことになっている、そうでしょう？　おかしいですよ……わたしはそれよりもうすこしあとにあの人を見たような気がするんで

す」
「いつ？　どこで？」
　しかしここまで話すと、クリチョークはわし鼻をひきのばし、刺すような目つきでダーシャを見つめた。しかしそれはほんの一瞬のことであった。興奮に燃えるダーシャの目や組み合わされている冷たい指が、このばあい彼女を信頼してもいいことを、なによりも明白に物語っていた。赤軍将校の妻であっても裏切るようなことはないだろう。クリチョークはダーシャの目に顔を近づけてたずねた。
「お宅にいるのはわたしたちだけですか？（ダーシャはいそいでうなずいた）いいですか、ダーリヤ・ドミートリエヴナ、わたしがこれから申し上げることは、わたしの生命に……」
「あなたはデニーキン軍の将校ですの？」
「そうです」
　ダーシャは指を鳴らし、窓のそとを、近づきがたい青空を悲しげにながめた。
「わたしのところなら、なにも心配はいりません」
「わたしはそう信じていました……それで五、六日のあいだお宅に泊めていただきたいと思ってるんですが……」
　彼はほとんどおどかすように、きっぱりした調子でこれを言った。ダーシャは顔を伏せた。
「結構ですわ……」
「しかしもしご心配なら……」彼はあとじさりした。「ちがいますか？　こわくありませんか？」ふたたび彼は近づいた。「わかります、わかります……しかしあなたはなにも恐れることはないんです。わたしはできるだけ用心します。夜だけ外出するようにしましょう。わたしがペテルブルクにいるのを知っている者はひとりもいませんよ」彼は帽子の裏地のなかから兵卒の身分証明書をとりだした。「どうです……イヴァン・スヴィシチェフ。赤軍兵。本物ですよ。この手で分捕ったんです。ところで、あなたはヴァジーム・ペトローヴィッチのことをお知りになりたかったんでしたね？　わたしの考えじゃ、どうもここにはなにか話の混乱しているところがあるようですよ……」
　クリチョークはダーシャの手をとって、にぎりしめた。「すると、あなたはわれわれの味方ですね、ダーリヤ・ドミートリエヴナ。ありがとう。全インテリゲンツィアや、辱しめられ苦しめられた全将校階級が義勇軍の神聖な旗の下に結集しつつあるんです。これは英雄たちの軍隊ですよ……いずれあなたにもわかりますが、ロシアは救われるでしょう。白い手の人々がロシアを救うんです。あんな下種連中にはロシアから手をひかせるんです！

感傷的なことはもうたくさんだ。勤労大衆か！　わたしはいま千五百キロものあいだ汽車の屋根にのってきたんです。その勤労大衆ってやつを観察させてもらいましたよ！　けだものです！　わたしははっきり言いますけどね、自分の心のうちに真のロシアを抱いているのはわれわれ少数の英雄だけです。そしてわれわれは、タヴリーダ宮殿の表玄関でわが国の法律を銃剣で串刺しにしてやるつもりですよ」

とめどのないことばの流れにダーシャは気の遠くなる思いだった。クリチョークは黒い爪で空をつきとおし、口角に泡をとばしてまくしたてた。きっと汽車の屋根の上であまりにもながいこと沈黙をしいられていたためであろう。

「ダーリヤ・ドミートリエヴナ、あなたにはかくさず言いましょう。わたしは、偵察と募兵のためにこの北の都へ派遣されてきたんです。多くの人々はまだわれわれの力を知りません。あなた方の新聞に言わせりゃ、われわれは単なる白軍の徒党だし、あさってあたりになればすっかり地上から消されてしまう、みじめな集団です。将校階級が進撃を恐れるのはきわめて当然だ、ということでしょう。しかしドンやクバーニ地方で実際に起きていることをご存じですか？　ドン・アタマンの軍隊は雪の玉のようにどんどん大きくなっています。ヴォローネジ県の赤軍は掃討されました。スタヴローポリは目下攻撃中です……われわれは、アタマンのクラスノフがヴォルガに進出して、ツァリーツィンを占領してくれるのを、毎日待ちわびているんです。たしかに、アタマンはドイツ軍と手をむすんではいますが、しかしこれは一時的なことです。われわれデニーキン軍は、閲兵式のときのように、クバーニの南部へ進んでいるんです。トルゴーヴァヤ、チホレツカヤ、ヴェリコクニヤージェスカヤは占領しました。ソローキンはこなごなに打ちくだかれました。カザーク村はどこでも狂喜して義勇軍を迎えていますよ。ベーラヤ・グリーナ付近でわれわれは大激戦を行なって、屍体の山のあいだを進んだんです。あなたの忠実なしもべであるこのわたしも腰のあたりまで血潮に浸ったほどでした」

ダーシャは彼の目を見つめながら、急に蒼ざめた。クリチョークはたかぶった薄笑いをうかべた。

「これで全部だと思いますか？　こんなのは制裁の序の口です。火の手は国じゅうにひろがろうとしています。サマーラ、オレンブルク、ウフィムの各県やウラル全土は炎につつまれていますよ。農民の優秀な部分はすすんで白軍を組織しているし、ヴォルガ中流地帯は全部チェコ軍の手中にあります。サマーラからヴラジヴォストークまでずっと反乱が起きています。厄介なドイツ軍さえ

いなけりゃ、ウクライナ全土がひとりの人間のように立ちあがったことでしょうよ。ヴォルガ上流地帯の町々はダイナマイト倉庫のようなもんです、火をつけさえすればいいんです。わたしはボリシェヴィキにあとひと月の生命もゆるさんし、やつらに一文の値うちも認めていません」

クリチョークは興奮のあまり身をふるわせた。いまや彼は小さなけもののようには見えなかった。曠野の風にさらされ戦火に鍛えられた、鼻の尖った、彼の顔をダーシャは見つめた。これは彼女のかげりない孤独の世界にとびこんできた炎のような生命であった。ダーシャはこめかみがはげしく痛み、胸が高鳴るのをおぼえた。彼がこまかい歯並みを見せてたばこを巻きはじめたとき、ダーシャはたずねた。

「あなた方は勝ちますわ。でも戦争はもう永久にないんでしょう？……そのあとはどうなるんでしょう？」

「そのあとどうなるかですって？」ことばをひきのばしながら、彼は目をほそめた。「そのあとは、ドイツ軍との戦争は最後的勝利を得るまで行ない、それから講和会議です。われわれは偉大な英雄としてそこへのりこむんですよ。そのあとは同盟諸国、すなわち全ヨーロッパが力を合わせて、ロシアに秩序、立法、議会政治、自由を再興するんです。これは将来の話ですがね……しかしごく近い将来です」

彼は急に胸の右側をおさえて、外套の下でなにかを手さぐりしていた。やがて二つに折れた小箱――たばこの空箱のふた――を注意ぶかくとりだして、指でまわした。そしてふたたび刺すようにダーシャを見つめた。

「わたしは危険をおかすわけにはゆきません。問題がどこにあるかわかったでしょう。この町では往来で身体検査をしています。わたしはある品物をあなたにお渡ししておきます」彼は空箱を丹念に分解して、名刺から切りぬいた、小さな、三角形の紙をとりだした。三角形の紙にはOとKという二文字が肉筆で書かれてあった。「これをかくしておいてください、ダーリヤ・ドミートリエヴナ、大切にしまっておいてください。あとで、これの使い道は教えますから……お願いです……こわくありませんか？」

「ええ」

「えらい！」

自分でも気づかぬうちに、ただひたむきな気持に駆られて、ダーシャは、大ロシアの首都や多くの町をおおっていた「祖国・自由擁護同盟」の陰謀のまっただなかに身をおくことになった。

デニーキン軍本営の密使クリチョークの行動はほとんど信じられないほど軽率なものであった。深い知り合い

でもなく、しかも赤軍将校の妻である女を最初の数語で信じてしまったのだ。しかし彼はかつてダーシャを恋したことがある。いま彼女の灰色の目を見つめているうちに、その目が『信じてください』と言っているなら、信じないわけにはいかないのだ。

このころ人間の意志を左右していたものは、霊感であって、冷たい思考ではなかった。さまざまな事件のあらしが吹きすさび、人間の海が荒れ狂って、人はだれしも自分を亡びゆく船の救済者であると感じ、ゆれるブリッジの上で拳銃を打ちふりながら、舵を右に左に向けていたのである。そしてすべてはそのころそんな気がしただけのことで、白衛軍の幻影は果てしないロシアのまわりをさまよっていた。目は憎悪にくもり、人々の思いこんでいたことも実は幻影の、つかのまの舞台装置のなかで起きたことなのだ。

かくてボリシェヴィキの破滅の近いことはうたがう余地のないものに思われた。干渉国の軍隊がすでに世界の四方から白軍の救援におもむき、一億のロシア農民が憲法制定会議を救世主として頼ってくるような気がしていた。単一にして不可分なる帝国の諸都市が労農兵代表者ソヴェートを追放して、そのあくる日には秩序と議会の合法政治とを復活するための合図を待つばかりになっているように思われていた。

すべての者が自分自身をあざむき、幻影にうかされていた――下着の着替えだけを持って南へのがれたペテルブルクの貴婦人たちから、さらには、尊大な笑みをうかべて、歴史的遠景のうちに自分の設定した事件の終結を待ち望んでいる、賢明なミリューコフ教授にいたるまで。

気休めの幻影を信じていたものの一つに、いわゆる「祖国・自由擁護同盟」があった。これはカザーク軍団長カレージンが自殺し、ロストフからコルニーロフの軍隊が退去したのちに、ボリース・サヴィンコフによって一八年の春のはじめに設立された。同盟は義勇軍の非合法組織のようなものであった。

その指導者サヴィンコフは秘密につつまれた、つかみどころのない人物である。彼は口ひげを染めてモスクワじゅうを歩きまわり、イギリス風の軍服、黄いろいゲートル、カーキ色の外套を身につけていた。同盟は軍隊式に組織されていて、司令部、師団、旅団、連隊、諜報機関、その他あらゆる仕事をもっていた。司令部にはペルフーロフ大佐がいた。

同盟員の募集はきびしい秘密のうちに行なわれた。ひとりの人間が知りうるのは四人の仲間にすぎなかった。失敗したばあいでも逮捕されるのはその五人だけで、それ以上をさぐりだすことはできなかった。司令部の所在地や指導者たちの名前は全員にとって秘密のままであっ

た。同盟への参加を希望する者の家には、連隊長か部隊長がきて、あれこれと査問し、俸給の前払いをわたし、自分のカードに暗号でアドレスを書きこんでゆくのだった。成員の数を示す小さな丸とアドレスの書かれた、これらのカードは毎週司令部にとどけられた。兵力の査閲は並木道の記念碑の近くで行なわれ、そのときには、組織の成員たちは外套のまえを独特の形にあけてくるか、あるいは外套の一定の場所に小さなリボンをつけてくることになっていた。連絡の任にあたる者には、名刺から切りぬいた三角形の紙が渡され、そこには二つの文字が記されてあって、最初の文字は合いことばを、二番目の文字は町の名を意味した。提示するばあいには、三角形の紙は、切りぬいた一片の厚紙の、もとの場所にはめこむのだった。同盟はすぐれた諜報機関をもっていた。四月には秘密会議において、サボタージュを中止させソヴィートの各施設に潜入して工作することが決議された。このようにして、同盟員たちは国家機関の中枢にはいりこんでいった。彼らの一部隊がモスクワ民警所のなかにも作られた。クレムリのなかに諜報者が送りこまれた。彼らは軍事管理のなかにはいりこみ、最高軍事会議のなかにまで潜入した。クレムリは彼らの網に固くつつまれたように見えた。

そのころアイヒホーン元帥麾下のドイツ軍によるモスクワ占領は避けがたいものと思われていた。そして、世界じゅうでただ一つドイツの武力のみを信頼する、つよい親独的傾向が同盟員たちのあいだにあったとはいえ、全般的な進路は連合国の上におかれていた。同盟の司令部では、ドイツ軍のモスクワ突入の日として六月十五日という日付さえきめていた。このゆえに、クレムリやモスクワの占領は断念し、同盟の軍隊をカザーニに進出させ、モスクワ近郊の橋や給水所をすべて爆破して、カザーニ、ニージニイ、コストロマー、ルイビンスク、ムーロムなどで反乱を起こし、チェコ軍と合流したうえ、ウラルと豊かなヴォルガ沿岸地帯にささえを求めて、東部戦線を形成することが決定されたのである。

ダーシャはクリチョークの話したことのすべてを信じた。ロシアの愛国者たち――あるいは、彼の表現によれば、精神の騎士たち――がたたかっているのは、馬鈴薯をかついだ恥知らずなフィンランド人たちが永久にすがたを消すようになるためであり、ヘテルブルクの街に明るい灯がともり、装いをこらした楽しげな人々がそこを歩くようになるためであり、悲しいときには羽飾りのついた帽子をかぶってパリへでかけることができるようになるためであった……夏公園の近くの原に《おどり魔》などがとびまわらないように、そして秋風がダーシャの子供の墓の上に吹きすさぶことのないようにするためで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo